

提案者 構想一覧

2022年3月28日

谷田川ルミ先生（芝浦工業大学）

学校教育のデジタル化と生徒1人1台の端末の導入は、子どもの学力の定着や健康面への不安、教師の負担、維持管理の難しさなどの問題が山積している。しかし、学校の外側では、すでにネット社会となっており、子どもたちはネットで飛び交う情報の中でこれから生き抜いていくことになる。このような状況においては、デジタル化における課題をどのように乗り越え、どのように利点を生かして共存していくかの方策の検討が必要となる。本報告では、小学校教員への調査データを用いて、教育のデジタル化における現状の課題を整理し、これからの学校が目指す道筋について考察する。

西本裕輝先生（琉球大学）

小学校教員を対象とした全国調査（公益財団法人中央教育研究所）により、タブレットの利用状況とそれに対する教員の意識について分析したところ、学力上位都道府県ほどタブレット利用について慎重であるという結果が得られた。これは教育現場におけるある種の葛藤の表れであるようにも思われる。これらの地域は従来の伝統的な教育によってこそ成果を出してきたとも言え、フライング気味に始まったデジタル化への不信感も根強いのではないだろうか。いずれにしても、タブレット導入はその危険性の指摘も含めあまりにも実証データが不足しているので、研究者はもっとこの問題に関心を払う必要がある。

米津英郎先生（富士宮市立黒田小学校）

令和3年4月、PC端末が全校児童に配付された。当初、PC端末の導入に前向きであった教員でさえ、すぐに疑問を呈した。端末準備にかかる業務量の多さ、校内におけるWi-Fi環境の脆弱さ、家庭におけるWi-Fi環境の整備のお願い、不透明な指導内容等、幾つもの問題が生じた。他方でよさも分かっていた。体育科等における動画の記録と再生、算数科における図形の学習、不登校児童へのオンライン学習、オンラインによる朝礼等である。

今後は、PC端末の利用が有効である学習と有効でない学習の整理を行いながら、授業改善に取り組む必要があると考えている。

渡部和則先生（秋田市立八橋小学）

タブレットの利用については、学習を助ける道具として、これまでの学習にどう活用していけるか、というスタンスで捉えている。学校の様子を見ると、総合のまとめ活動や発表、理科・社会の資料検索、算数の問題練習などに使っている様子が見られる。また、家庭には数回持ち帰り、接続テスト行っているが、オンラインの練習で終わっている。コンピュータの学校導入でもそうだったが、子どもたちのリテラシーやマナーの育成と教員が「使いやすい、便利だ、効果がある」と思って使えるソフトや活用方法の開発の同時進行が必要だと思う。

藤田由美子先生（福岡大学）

さながら映画『マトリックス』の世界を実現しつつある現代社会にあって、ICT やコンピュータ・リテラシーは必要最低限のツールとなっている。各提案から、学校現場における「一人一台」端末導入施策の急速な推進への戸惑いと、有効活用への模索がみてとれる。上の施策は些か準備不足ではあれど、学校教育に大きな転換をもたらす可能性がある。デジタル端末の有効活用は、多様な子どもたちの学びを保障し、「デジタル支配社会」を生き抜く術の獲得に寄与するだろう。しかしながら、そのためには、新学習指導要領よりさらに踏み込んだ、教育方法論の転換が必要ではないか。（藤田）

遠藤宏美先生（宮崎大学）

一人一台 PC タブレットは、OS や通信環境の整備状況、家庭での使用の可否などが自治体・各学校によって大きく異なっている。かくのごとく多種多様に与えられたタブレット端末によって身に付けられる資質・能力は、「社会に開かれた教育課程」を謳う新学習指導要領の実現に追い風となれるだろうか。学校教育 DX の進展は、従来の教科（等）観や学習観・指導観の転換を促すチャンスにもなると考えられるが、学校では及び腰の様子も多々見られる。これらの実現のために必要な条件を学校現場の実態を踏まえて考えていくことが、次のステップとして必要であるのだろう。（遠藤）

角替弘規先生（静岡県立大学）

外国にルーツを持つ子どもたちが学校における学びを進める中で、PC タブレットの一人一台の配布は大きなメリットになる可能性を秘めている。異なる言語、異なる文化的背景を持つ子どもたちにとって、日常生活や学習を進める中で日本語の習得が大きなハードルとなっていることは論を俟たないが、このハードルを一気に下げ得る潜在力があると考えられるからである。とりわけ日本語指導教室などにおける PC 活用と日本語学習支援のあり方や、通常の教室での教科学習における言語的な支援の可能性など、検討すべき課題は多く、今後ハード・ソフト共に十分な検討を早急に進めることが求められると思われる。それと共に外国ルーツの子どもたちがもつ教育上の可能性について教員並びに研究者がもっと注目する必要があるだろう。（角替弘規）